課題解決型インターンシップ

社会との接点求め 自ら動く学生たち

キャリアデザインセンターが川崎市の協力を得て実施しているこのインターンシップは「商店街を活性化させたい」「新商品の販売戦略を考えてほしい」といった地域やNPO、企業などから提示されたテーマに学生ならではの視点でプランを考え、長期間活動する。今月号では、3つのテーマに取り組むグループの活動状況を聞いた。

地域の架け橋に――

スポーツクラブの将来構想

▲「インテリア書道」について話し合う

「NPO法人高津総合型スポーツクラブSELF」は、高津中学校の施設を活用して「スポーツが育む（はぐくむ）ひと・まち・みらい」をテーマに、誰もが参加できるスポーツクラブで会員は現在約2000人いる。会長の平口和宏さんは、本学で開講しているコミュニティ・ビジネスで活躍する人材を輩出する「KS（川崎・専修）コミュニティ・ビジネス・アカデミー」修了生。同クラブから「20代から30代の女性の利用者を増やす企画を」と依頼があり、4つのゼミが活動している。

経営学部・新井範子ゼミの小野開さん（3年次）は「営利目的ではなく、世代間の交流や地域活性化のために開設され、次世代を担う子どもたちの健全育成を基本理念としているところに共感しました」と参加動機を話す。同じゼミの小澤直也さん（同）とともに「主婦層」をターゲットにイベントを企画している。「高津中には誰でも参加できる『授業参観週間』があります。それに合わせて講座を開催し、習った後に家でもできる講座を開講します」（小野さん）。「高津中」に足を運んでもらい、同時に「SELF」を認知してもらう作戦だ。アロマテラピーやガーデニング、おいしいコーヒーの淹（い）れ方などの中から選んだのは「インテリア書道」。講師役として「書道がうまいと聞いていた」同じインターンシップに取り組む池本正純ゼミの山田雅大さん（同）に声をかけた。「インテリア書道とは、好きな文字を書き、周囲を好きな色で塗ったり、模様を描いたりしていくものです。部屋のインテリアや、表札などにも使えます」（小澤さん）。

山田さんは「私たちのグループでは、小さいお子さんを持つお母さんたちでも気軽に参加できるように、高津中以外で行うものを構想中ですが、まだ具体的なプランが出ていません。同じテーマで取り組んでいる者同士、協力して、より良いものができれば」と快く引き受けた。

プレゼンの実践にも

就職活動を控えているが「高津中の近隣の方に講師の依頼をしたり、『SELF』を理解してもらうためのさまざまな活動に参加したりすることで、プレゼンの実践になっています。自分たちの力で何かを成し遂げるということは、何事にも代えがたい貴重な経験になり、就職活動での『強み』になると思います」と小澤さんは話す。

小野さんは「今後も2カ月に1回程度のペースでイベントを実施したい。インターンシップだけで終わらせず、将来的には、専大生だけで、スポーツを通じた地域貢献活動を実施してみたい」と語り、この経験をきっかけにさらなる構想が広がる。

エコキャップアートとオリジナルタンブラー

川崎駅前6商店街合同イベント「いいじゃんかわさき」に出展

経営学部2年次の三宅雄紀さん、尾形光律さん、関口和弥さんは10月16、17の両日、JR川崎駅東口周辺の6商店街（たちばな通り・パレール商店会・仲見世通り・東田あべにゅー・平和通り・いさご通り）が合同で行う「第18回いいじゃんかわさき」（以下、いいじゃん）にブースを出展する。

「今年のテーマ『チャレンジ・エコ活！』にあわせ、ペットボトルのキャップで作品を描く『エコキャップアート』とオリジナルのタンブラーを作ってもらい、売上を途上国にワクチンを提供している団体に寄付するという企画を考えています。使用したキャップもワクチンを提供している団体に寄付します。幅広い年齢層の方に、楽しんで環境について考えてほしい」と代表の三宅さん。

▲ 企画を説明する三宅さんたち

7月10日に川崎駅前の「ビューティー安岡」で行われた打ち合わせでは、前回指摘された点を修正した企画を説明した。安岡裕司実行委員長らからは、「集客よりも参加した人たちが楽しむということに重点をおき、学生ならではの視点で提案を。前回よりもポイントがはっきりしてきたが、なぜ、この企画なのかという点を掘り下げることが大切。その結果、企画が変わってしまってもかまわない」と指摘を受けた。

「大学の4年間は大人になるための貴重な時間だが、何も行動を起こさずに終わってしまうことに不安を抱いた」という三宅さんは、「自ら動くことで、社会とのかかわりを持ちたい」とインターンシップに申し込んだ。『いいじゃん』は、企画を自由にやらせてもらえる点が魅力ですが、何をしてもいいということは、実はとても困難を伴うのだと実感しています」。尾形さんは、オリジナルタンブラーについて「作ってもらった中紙を写真を撮ってタンブラーに入れるサービスや、公園内の飲食店と連携して、オリジナルタンブラーを持ち込むと割引になるサービスを考えています。プレゼントや写真立てとしても使ってもらえると思います」、関口さんは「エコキャップアートは、地球などの模型を作ってステージ上に飾っておくことで、子どもたちの興味を引くのではないかと思います。打ち合わせで面白いプランだと評価してもらったので、実現させたい」とそれぞれ話す。

「思いを共有してチームがまとまるには、とにかく話し合うこと。せっかく与えられた機会なので、失敗を恐れずに全員で協力して、成功させたい」と抱負を語る3人の成果をイベント当日、ぜひご覧いただきたい。

ツイッターを使ったビジネスの可能性探る――

アクセサリーの企画・販売

金型プラスチック製作の㈱モルテックの課題「ツイッターを使ったキラキラアクセサリー企画・販売」には19人が2チームに分かれて、アイデアを出している。

ツイッターを使い始めていた松井宏一社長が、昨年12月に大学で講演した際に、このインターンシップを知り、「時間の制約がなく、自由に意見を言い合える新しいツールをどのようにビジネスに使えるのかを学生たちの力を借りて検証したい」と初めて参加を申し込んだ。

ツイッター仲間で、プロダクトデザイナーの平川貴啓さんにも協力を依頼。平川さんが学生のアイデアをもとに商品をデザインし、学生たちは販売戦略を考えて、実際に販売するのがこのインターンシップのゴールだ。

▲ 松井社長からアドバイスを受ける学生たち

平川さんは「生活者の視点から出る、学生らしいアイデアに期待している」と話す。

7月26日に社内で行われた打ち合わせにAチームから長畑かおりさん（代表）、久下慶太さん、笹島孝文さん、松本祐樹さん、竹内佑依さん、今野万琴さん（いずれも経営2）が、Bチームは代表の鈴木健太郎さん（経営3）と高橋孝明さん（経営2）が出席。進行状況の報告と今後のスケジュールを確認し合った。

松井社長は、「意見を出しやすい、第三者から意見をもらいやすいという『ツイッター』の良さを現時点ではまったく生かせていない。強い意見に流されるのではなく、自分という『個』を発信する場として活用してほしい」と激励。「いつ誰が、どのような場面で使うのか、ストーリーを考え、その思いを伝える」プランの立て方、プランの決定方法などをアドバイスした。学生たちはこれまでの反省を踏まえ、「周囲の協力を得てやらせていただいていることを忘れずにしよう。学生の遊びに終わらせてはならない」と真剣に意見を出し合っていた。

Aチームの長畑さんは、「商品開発とツイッターというキーワードにひかれて参加を決めました。これまではツイッターを使いこなせていなかったので、デザインの決定に向けて今まで以上に活用しなければ、と思っています。使い始めて知らない人とコミュニケーションできることの楽しさを感じました。多くの人にこの楽しさを知ってほしいですね」。

Bチームの鈴木さんは唯一の3年次生。「メンバーが同じ方向を向き、同じ『熱さ』を感じるようにしていくのがリーダーの役割だと思う。インターンシップが終わったとき、全体を見渡す力や統率力が身についていればうれしい」と話す。

モチベーションが下がっていると感じた時期、松井社長は全員にメールを送った。「いいアイデアがない場合は、中止することもある。厳しいことも言うが、『やってよかった』と思える経験になるよう期待している。一生懸命にやったことしか身につかない」。

両チームのアイデアの参考になるよう、ぜひフォローをしていただきたい。Aチーム・ハッシュタグ（#moltwi）Bチーム・ハッシュタグ（#kiramol）

オープンキャンパス

神田キャンパス

◆7月18日、約1500人が来場。学部別説明や模擬授業、ご父母向けの相談などのほか、法廷教室では、学生スタッフによる「模擬裁判」も行われた。

▲ 清水順子商学部准教授の模擬授業

▲ 初開催のご父母向け相談会で、育友会の紹介をする菅沼堅吾会長

▲ 模擬裁判では学生スタッフが迫真の演技を披露

生田キャンパス

◆7月31日、8月2日に開かれ、両日合計で約7000人の来場があった。模擬授業、学生スタッフのトークライブ、キャンパスツアーなどが行われた。創立130周年記念映画「学校をつくろう」ダイジェスト版の上映も行われた。

▲ 大勢の高校生が来場

▲「学校をつくろう」ダイジェスト版も上映された

▲ 学生スタッフによるトークライブ

次回オープンキャンパスは、9月19日（日）、生田キャンパスで開催します。